

日本韻文史

新井 章
北原 由夫
武田 政市
著

著 者 略 歴

新井 章（あらい・あきら）

1924年、長野県に生まれる。現在、駒沢短期
大学勤務。著書「島本赤彦」他。

北原由夫（きたはら・よしお）

1930年、長野県に生まれる。現在、東京文化
短期大学・国士舘大学勤務。著書「新教育の
運動と文芸教育」他。

武田政市（たけだ・まさいち）

1906年、愛知県に生まれる。現在、東京文化
医技専門学校勤務。著書「国語表現学を模索す
る」他。

日本韻文史

昭和54年4月20日／初版印刷

昭和54年4月30日／初版発行

著 者 新井章／北原由夫／武田政市

発行者 及川篤二

発行所 株式会社 桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町2-8-13

電話／03-295 8771 掛替東京／6-18020

印刷所 株式会社 日本プリントセンター

製本所 長島紙工製本所

Printed in Japan 3092-790431・0723

日本韻文史

新井 章
北原 由夫
武田 政市 著

目次

〔上代・中古〕

一、上代生活と文学……………	一一
----------------	----

民族の生存……………	一一
------------	----

韻文の発生……………	一三
------------	----

二、詩歌の発生と信仰……………	一七
-----------------	----

信仰と詩歌……………	一七
------------	----

国見歌……………	二四
----------	----

野遊びの歌……………	二七
------------	----

三、素朴平遠の歌風……………	三〇
----------------	----

庶民的憶良……………	三〇
------------	----

民謡的色彩の旋頭歌……………	三四
----------------	----

四、民衆の歌……………	三七
-------------	----

労働者の歌……………	三七
防人の歌……………	四一
五、古今集に潜む遊戲性……………	四七
写实的から理知的……………	四七
耽美的美意識と知的技巧……………	五一
六、美的享樂の追求歌……………	五四
画讃的觀念美……………	五四
優雅艷麗の恋歌……………	五七
七、清新な感覚と知巧性……………	六一
清冽な美と哀歌……………	六一
物静かな沈潜の中の「あはれ」……………	六五
八、民族感情流露の歌……………	六七
民族性豊かな東遊歌・風俗歌……………	六七

民衆感情のひそむ梁塵秘抄……………六九

〔中世・近世〕

一、乱世を超えるもの……………七三

「平家物語」の世界観……………七三

疎外された貴族たち……………七七

二、王朝の夕映え……………八〇

閑居・苦闘の生涯……………八〇

女房文学のゆくえ……………八六

三、みやびの文化と鄙^{ひな}の文化……………九一

足利將軍のみやび化……………九一

内乱期の文学と思想……………九六

四、能と狂言の時代……………一〇〇

独創的演劇としての猿楽……………一〇〇

連歌の役割	一〇四
五、俳諧美の本質	一一〇
「正風」への道	一一〇
正風開眼	一一六
六、元禄から化政期へ	一二三
心中の美学	一二三
天明から化政期へ	一二七
七、封建制下の国民的自覚	一三五
神ながらの道	一三五
歌壇の新風	一三九
八、幕末のナシヨナリズム	一四四
川柳と狂歌	一四五
幕末の歌人たち	一五一

〔近代・現代〕

一、近代と近代詩歌の曙	一五七
近代とは何か	一五七
『新体詩抄』	一五九
『於母影』	一六四
二、浪漫主義の精神的高揚	一六九
『文学界』の人々	一六九
『明星』派の歌人	一七五
象徴派の詩人たち	一八〇
三、和歌改良論と俳句革新運動	一八二
和歌の新しい息吹	一八二
子規の改革論	一八四
四、口語自由詩の誕生と思想	一九〇
詩精神の改革	一九〇

+	光太郎と朔太郎……………	一九六
---	--------------	-----

五、	民衆派の思想と運動……………	二〇二
----	----------------	-----

	主張する民衆……………	二〇二
--	-------------	-----

	プロレタリアと民衆……………	二〇七
--	----------------	-----

六、	大正末期の思想と詩歌……………	二一一
----	-----------------	-----

	既成観念の崩壊……………	二一一
--	--------------	-----

	大正歌壇と新しい主張……………	二一四
--	-----------------	-----

七、	昭和初年の詩のグループ……………	二二一
----	------------------	-----

	モダニズムと超現実主義……………	二二一
--	------------------	-----

	叙情詩と新しいポエジー……………	二二五
--	------------------	-----

八、	戦時下の詩人たち……………	二三〇
----	---------------	-----

	『コギト』と詩人たち……………	二三〇
--	-----------------	-----

	ロマン主義と『人民文庫』……………	二三四
--	-------------------	-----

	『歷程』の軌跡……………	二三七
--	--------------	-----

日本韻文史

一、上代生活と文学

民族の生存

大和民族は、世界のいずれの国からここに移りすむようになったのか、その経路はいろいろ臆測はされているがさだかではない。北方の異民族蝦夷とのつながり、南方の大陸や半島からの流入などにより種々の人種の混合によって民族形成ができたのか、その昔から先住民があったのか、あったとしたらその先住民が長い歴史の中で大和民族としての、言語、風俗、習慣を統一させてしまい、民族としての生活を安定させたのである。

そうしたなかで、前一世紀のころにおいては、多くの小国家が分立し、原始の部落国家であった。それがために、二世紀ごろは統一ある国家組織はできなかった。三世紀に入って強い力を持つ国が弱小国を統一し邪馬台国のような国の出現となったのである。四、五世紀に入りいよいよ、小国の豪族の統一ができ、統一国家の大和朝廷が生れるまでになった。このことについて津田左右吉は「民族が遠い昔に於て政治的に如何なる状態にあつたかは確かに知るよしも無いが、前一世紀のころに於ては、それぞれに君主を戴く多くの小国家が形づくられてゐたことは判るので、それはその時代よりかなり前からの状態が継承せられてゐたのであらう。この多くの小国家のうち、今の大和の地域を中心とする一国が、次第にその他の多くの小国家を服属させ、漸次その勢力を大きくしていくつて、終に全民族をその權威の下に収めたのが、統一国家の形成であつて、その大和の国家の君主の家が統一国家の首長としての皇室となられたのである。国家の統一は民族の内部に発生した事件であり、皇室は民族の内部に於

ける存在であるので、ここに国民と民族とが同義語として用ゐ得られる民族国家としてのわれわれの国家の特性がある。」（『文学に現はれたる国民思想の研究』）とのべさらに「幾つもの民族を包含する国家や幾つもの国家に分属してゐる民族が、いかに不幸な歴史をもつてゐるかを見れば、すぐわかる」と同じ民族の統一国家である幸せにふれている。それ故に大和民族のまとまりや、団結力などが育ち国としての力も急速に育つていったのであらう。

五世紀から六世紀にかけて大陸からの文化の輸入は激しく、仏教、儒教、暦法、陰陽道おんみょうどうなどに関係した書物や、遣隋使の派遣や、学生や学僧の随行により大陸からの文化は急速に入り、なかでも儒教思想は国家統一に大きな役目を果たした。津田左右吉は「シナ思想といへば、何よりも先づ儒教思想の思ひ浮かべられるのが常であるが、文学に現はれてゐるもの、また時代から見て比較的早期に日本人の間に伝へられたものは、それよりもむしろ別の方面なのである。しかしここでは先づ一応儒教思想について考へてみる。儒教は道德及び政治の教であるが、その一般的規範としての仁義礼智の語は、この規範を体得した境界を示す徳の語と共に、聖徳太子の定めた冠位の名称に用ひられてゐるから、太子の時代にかういふ知識のあつたことはわかる。次にその道德は、実践的には、父子の關係によつて代表せられる家族間のそれと君臣間のそれとが主になつてゐる。さうしてそれは先王の定めたもの、帝王の教化によつて行はれるものであつて、その教化の具として、或は道德の具体的表現として、礼が重んぜられるが、礼は秩序の表示である。聖徳太子に仮託せられてはゐるが、実は大化以後の作であらうと解せられる十七条の憲法に、君父に順ふことを言ひ、礼の重んずべきことをいつてあること、またそれが摂政の地位にあつた聖徳太子の訓令の形で示されてゐるところに、この儒教道德の思想が現はれてゐる。なほこの教化思想は令の制度にも用ひてあるので、儒教道德の思想を以て民を教化することが地方官の職掌として定められてゐるし、時々ときどきの詔勅にも道德を説き礼を説いた文字が見え、皇太子が五節の舞を舞はれたことについて、礼楽は君臣祖子の理を教へるものであ

るといふことさへいはれてゐる（天平十五年の宣命）。或はまた「宣令天下家藏孝経一本精勤誦習」といふ詔命が発せられ（天平宝字元年）孝謙天皇の讓位は皇太后に対する孝養のためとさへせられてゐる（同二年宣令）。」（『同上』）このように、儒教思想により皇室と朝廷の官僚との関係を君臣として縦の關係に位置づけ、政治思想、道德思想として定着させたのである。

この時代背景の中で日本民族のまとまりができ、国家社会が形成されていったのである。そこには、神話が生れ、説話が生れた。それは、口承文学から記載文学に移る過程のなかで民族意識をはっきりとのぞかせている。

韻文の発生

上代歌謡は日本文学史上重要な意義をもつものである。大和民族の韻文発生起源や、集団文学の発生源として、更に和歌発生の母体として、重要な役割をはたしている。

ウタウの語彙は「打つ」の動詞に継続を示す。「ふ」が付いて成立したといわれる。要するに、「打たふ」は「打ち続ける」の意がもとになっている。つまり、手で拍手をとるにも、足で拍手をとるにも、太鼓を打つにも、一定のリズムで叩き続けるということから、ウタウの意味が生まれている。更に、この言葉の機能には衝撃を与える意味がある。衝撃を与える対象は、相手の魂である。相手の魂が、ウタウことによって反応するのは、言葉にこもる精霊の衝撃作用によるからである。この言葉にこもる精霊を、古代の典籍は「言霊ことだま」と称呼している。『古事記』の神話にある、神婚説話で、伊邪那岐命が「あなにやしえをとめを」と唱えたのにこたえて伊邪那美命が「あなにやしえをとこを」と唱和して、すなわち男神と女神が夫婦になるこの諾冉二神の「みとのまぐはい神話」に、日本のウタの起源を求める態度の、古くから存するのは、この言霊による掛合をみるからである。これが韻文発生の根源になる。

現在残っているものは、『古事記』『風土記』『琴歌譜きんかふ』『仏足石歌碑』『日本霊異』などに約三百首ある。そ

のうち『古事記』に百十四首。『日本書紀』に百二十九首、その中で重複しているものが五十首ある。上代歌謡の中心はなんといっても、記紀歌謡であるということができよう。

『古事記』は太安万侶の撰で、和銅五年（七一二）に成っている。皇室を権威あるものとして位置づける政治的意図のもとに撰ばれた書で、我國の詩歌の初期の展開を辿ることができる。『日本書記』は舍人親王・太安万侶の撰で三十卷、養老四年（七二〇）に撰進された。

これ等の記紀歌謡は何らかにおいて物語に取り入れられ、いわゆる物語化されている。物語を背景として物語伝承者が作った歌もあるが、物語と関係しない独立の歌謡も数多く指摘されてきている。物語の中で歌謡がどのような意味を持ち、文芸としていかに興味を惹くかと同時に、歌謡を物語から切り離すことにおいての、その歌の機能や目的などを究明する必要がある。

この大神、初め須賀の宮作らしし時に、其他より雲立ち騰りき。かれ、御歌よみしたまふ。その歌は、

八雲立つ 出雲八重垣

妻ごみに 八重垣造る その八重垣を

この歌は『古事記』『日本書紀』ともに最初に見える歌で、我国最古の歌として有名であるが、五七・五七・七の三十一音の整型された律調が、最初から存在することは有り得ないから、原始の型でないことは明らかであろう。恐らく橘守部の云うように、最初は「立ち出る雲も、妻ごめに、八重垣造るよ」の如き会話的発想の中から生まれたものであったと思う。上代の雅楽に謡うために整えられたのであろう。記の上巻によれば、須佐之男命が須賀宮を御造営になった時、そこから雲が立ち上ったのを見て作ったと伝えられる歌だが、作者はもちろん命ではない。民間でそう謡はれたものを物語にむすびつけたのである。これは結婚の時の新室はがいの歌である。上代は妻を迎

えると新しく住居を構えて、新築を祝う歌を作る風習があった。これはそれらの歌の一を、須佐之男命の伝承に結びつけたのである。「八」を三回も繰り返す心の躍動は単純明快、その繰返しの句の中に新妻と新居に入る喜びが、直截に素朴に力強く表現されている。更に、直接に新居のことを云わず雲が幾層にも垣を作ると表現したところに、余情としての新婚の神秘さもほのめかされ寿ぎの情も強いものとなっている。

上代村落の首長は、小国の長老として祭司であり、公共的呪術師でもあって、その配下の民衆を治めるために呪術や、祭祀の儀礼を行ない統治していた。住民はまたその保護されることを期待し、生活を営んでいたのである。

そうした信仰生活の中で、村落の住民が呪術や祭祀を行う神聖な場所が自然に定まり後の神社の起源の一つとなったのである。神社をとりまく垣を、玉垣、端垣、神垣などといひ幾重にも垣を重ねることにより、神聖なるものと考えた信仰がある。その辺の事情を理解して鑑賞する必要がある。

かれ天皇 かみみか 崩 あがり まして後に、その庶兄 まませ 当芸志美美の命、その嫡后 おおきさき 伊須気余理比売 すけよりひめ を娶 よば ひし時に、その三柱の弟たちを殺 ころ せむとして謀 まうた れるほどに、その御祖伊須気余理比売、患 うれ 苦 み ひまして、歌以ちてその御子等に知らしめたまひき。その歌

狭井河よ 雲たち渡り

畝火山 木の葉さやぎぬ 風吹かむとす

記の中巻、神武天皇が崩御された後に、その異母兄の当芸志美美命（綏靖天皇の兄）が異母弟の三人を殺そうと企てた。その時に、三人の母の伊須気余理比売が心配して、歌によって危急を知らせた。という伝承を持つ歌である。

事件の勃発を暗示するともたれなくはないが、この物語伝説を切り離して歌をみると、強風の直前に無気味に雲